

奈良文化財研究所（以下、「奈文研」と略す）は、これまで、わが国の古代国家揺籃の地である飛鳥地域と藤原宮・京、そして平城宮・京および南都七寺の調査を六〇年間にわたって継続的に行ってきました。その調査研究の特徴は、考古学を含めたさまざまな分野の研究者が共同して総合的調査研究を行う点にあり、古代史を復元するうえで数々の重要な成果をあげ、国内外から高い評価を受けています。一九五二年の設立から六〇年という長い期間になりますので数多くの成果があり、それらすべてを紹介したいところですが、時間も足りませんので、本日はそのなかで特に重要で驚くべき発見があった遺跡の発掘調査について紹介させていただきます。

奈文研の設立目的

奈文研の研究対象は、文化財保護法で定められているさまざまな種類の文化財の中で、無形文化財、民俗資料、天然記念物以外のすべての種類の文化財です。一九五二年、奈文研は行政機関である文化財保護委員会（現文化庁）にとって唯一の付属研究所として発足しました。その設立目的として、建造物の修理や指定のための調査、埋蔵文化財の緊急発掘調査、美術工芸関係あるいは名勝庭園、史跡指定のための調査研究などに協力することが明瞭に掲げられています。これに加えて、研究成果を文化財保護行政に反映させることが、発足当初から強く打ち出されています。具体的には、遺跡の発掘調査の成果を保存と活用で反映させることです。たんなる学術的関心・興味の充足ではなく、行政機関である文化庁にとっての唯一の付属研究所として、研究成果を文化財保護、遺跡の保存と活用で反映させる先駆けになることが当初の設立目的でした。

設立してからすぐの一九五〇年代半ばには、奈文研による本格的な発掘調査がスタートします。その契機となったのが一九五四年に策定された、飛鳥地域吉野川分水東部幹線水路敷設計画です。京都府南部には木津川があり、奈良県南部には、最終的には和歌山県の紀の川に流れる吉野川がありますが、奈良県北部には大きな河川が存在しません。そのため江戸時代以前より常に農業用水が不足しており、一九五〇年代、水不足の解消は地域住民の悲願となっていました。これを解消するために策定されたのが先の水路敷設計画です。紀の川、吉野川から水路をつくって奈良県北部に水を流し、それをもって農業用水の不足を緩和させるという計画です。その計画では、明日香村の中心部近くを水路が通ることになっていました（図1）。

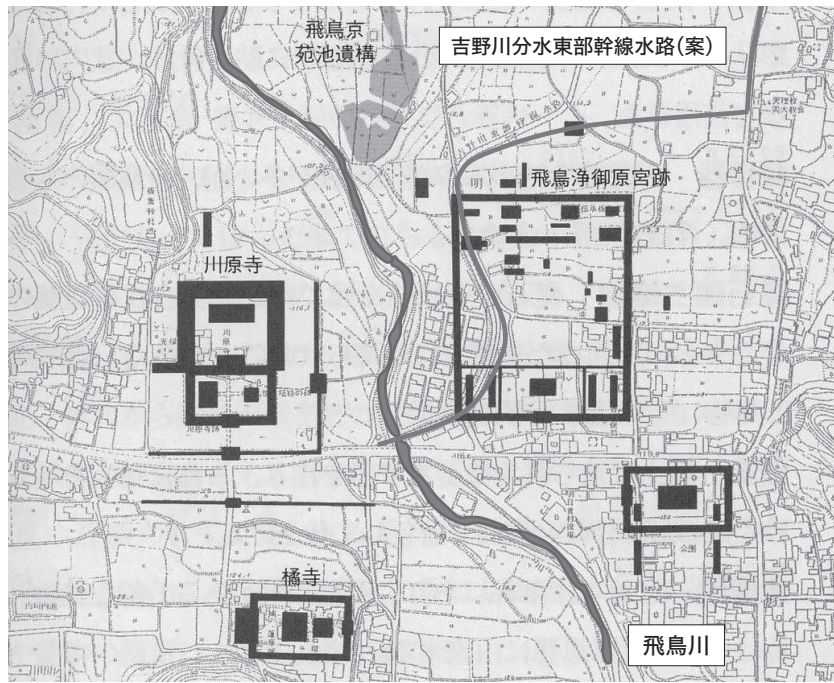


図1 明日香村中心部の古代遺跡と、当初の吉野川分水東部幹線水路敷設計画